

江島茂逸雜纂

八

680

I

6



PAT. NO. 562815

680

工

1

第八卷

高橋紹運傳

高橋徳次郎傳

福岡藩民政略誌拔萃

小藤平藏畧傳

正徳二年十一月二十七日 高橋

○高橋紹運(二) 十室杉林 無辰居士編述

。結言

漢て傳の昔元龜天正の除我九木の代は其亂離の極  
點の在り當時暴虐の大なるあり此前の乱れより  
い高橋あり安藤い毛利ありて各確と争ひて天下を  
亂れを止まらざるを知らず一葉の乱れも世の治を  
亂る事と雖も我邦の事也其時天正の世の乱れは  
起し略取錯綜の乱れを成し除高橋の世の乱れは  
年より我邦の世の乱れを成し除高橋の世の乱れは  
其の世の乱れを成し除高橋の世の乱れは









これ(天仁三年)大内止し市後毛利に属せざるに宗茂  
はこれに承しぬ九州探検を賜りて補てこれに属せざる  
是れ九州の宗茂也 此之壘前(三)可念致に於て毛利の兵  
略くも敗れて(天仁三年)九州の士に笑われしを後  
り元就は間牒を九州に送り縁を求め信とぬの諸族  
に就きて陸方の内通せしむ元就は復行の想を信茂の  
命もを聞かぬ先づ承りて是意を説くも信茂は自らの  
勢を先利に通ず元宗(神目長門守)文信と秋月城  
に攻め取らざりて文信自(神目)信茂は時  
具討手に向ひたりし文信も長子を生けりてこれに属せざる  
此の生(信茂)是常(信茂)時(信茂)の事(信茂)も(信茂)此(信茂)の(信茂)  
是と(信茂)父の(信茂)報(信茂)を(信茂)以(信茂)て(信茂)此(信茂)功(信茂)に(信茂)回(信茂)ら(信茂)す

信茂と諸と(豊)後の(動)静を(恐)ふ(信)茂(又)信(茂)と  
父子(切)絶(せ)ざる(也)日(本)記(に)宗(茂)も(罪)を(行)は(ぬ)とい(ふ)七

四ノ海(記)後(茂)と(前)茂(と)の(別)は(約)せ(し)と(る)也(九)州(記)に(信)茂(は)其(の)宗(茂)に(属)せ(ず)と(す)其(の)内(通)も(其(の)後)に(説)く

◎高松の(三)

三ノ守(信)茂(と)毛利(通)し(秋)月(長)門(守)文(信)茂(と)  
宗(茂)大(正)に(属)し(信)茂(と)付(り)是(の)面(目)を(圖)す

三ノ守(信)茂(と)毛利(通)し(秋)月(長)門(守)文(信)茂(と)  
宗(茂)大(正)に(属)し(信)茂(と)付(り)是(の)面(目)を(圖)す

影(之)水(信)茂(と)年(月)能(信)茂(は)宗(茂)を(領)域(と)し(其)所(受)

出(て)宗(茂)と(無)異(也)信(茂)の(内)通(も)宗(茂)を(整)ふ(と)秋(月)  
信(茂)は(時)に(毛利)の(傍)に(信)茂(の)事(と)起(る)事(を)論(ず)

大(正)の(初)日

信(茂)の(事)を(宗)茂(に)告(げ)る





ろしやういぬれお大なる兵隊の陣の陣が後と後橋の如き  
 は僅に中へ中へ毛利の陣とて後とて毛利の陣とて  
 年は兵糧攻めを以て攻めたるもの好まむ有様多し此の如  
 陣内より陣外へ逃れしもの好まむ有様多し此の如  
 と成兵士後へ逃れしもの好まむ有様多し此の如  
 市は城の中へ逃れしもの好まむ有様多し此の如  
 陣内より陣外へ逃れしもの好まむ有様多し此の如  
 と毛利の陣とて毛利の陣とて毛利の陣とて毛利の陣とて  
 ありし陣内より陣外へ逃れしもの好まむ有様多し此の如  
 ちふ元氣は家来の秋月の高き陣の長野橋井、後  
 せんとの陣ありしもの好まむ有様多し此の如  
 後、陣前の陣内より陣外へ逃れしもの好まむ有様多し此の如  
 毛利の陣とて毛利の陣とて毛利の陣とて毛利の陣とて  
**退陣**し、事次所の高き陣の長野橋井、後、陣前の陣内より陣外へ逃れしもの好まむ有様多し此の如  
 ちくは後、陣前の陣内より陣外へ逃れしもの好まむ有様多し此の如  
 事年の内、陣前の陣内より陣外へ逃れしもの好まむ有様多し此の如  
 年とて毛利の陣とて毛利の陣とて毛利の陣とて毛利の陣とて  
 後、陣前の陣内より陣外へ逃れしもの好まむ有様多し此の如  
 起る、大なる方丈の敗れ、陣内より陣外へ逃れしもの好まむ有様多し此の如  
 大なる方丈の敗れ、陣内より陣外へ逃れしもの好まむ有様多し此の如  
 七の陣内より陣外へ逃れしもの好まむ有様多し此の如  
 陣内より陣外へ逃れしもの好まむ有様多し此の如  
 人おとて毛利の陣とて毛利の陣とて毛利の陣とて毛利の陣とて  
 人おとて毛利の陣とて毛利の陣とて毛利の陣とて毛利の陣とて

左近を以て大軍を率ひ筑前の後向し、今年四月廿四日  
すり、立花城を圍み晝夜を合せし。攻めしむる立花の城  
中には高き世は高きより城郭として、毛利の將清水  
左近將監は長將御多尾張守、所属安武民部並書  
兵つとを在り、徳和、志カ多入、殊死と防戦す。然るに徳載  
り、特野田を御門大夫あり、毛利の黒田と相討つ。其の  
二、次丹後守は立通し、城中より裏方と其在を、如く成  
兵つとを散れし。毛利の軍は、要するに、守るるに、立花  
と、遂に陥る。して、徳載の城を、焼く。討死し、安武民部  
並は、高き、立花城主の、手い、生捕り、其の、は、高き、大軍死也。  
西、此、高き、立花城は、高き、村の、向き、山、の、高き、あり、徳載、  
徳載、高き、立花城は、高き、村の、向き、山、の、高き、あり、徳載、  
徳載、高き、立花城は、高き、村の、向き、山、の、高き、あり、徳載、

左近を以て大軍を率ひ筑前の後向し、今年四月廿四日  
すり、立花城を圍み晝夜を合せし。攻めしむる立花の城  
中には高き世は高きより城郭として、毛利の將清水  
左近將監は長將御多尾張守、所属安武民部並書  
兵つとを在り、徳和、志カ多入、殊死と防戦す。然るに徳載  
り、特野田を御門大夫あり、毛利の黒田と相討つ。其の  
二、次丹後守は立通し、城中より裏方と其在を、如く成  
兵つとを散れし。毛利の軍は、要するに、守るるに、立花  
と、遂に陥る。して、徳載の城を、焼く。討死し、安武民部  
並は、高き、立花城主の、手い、生捕り、其の、は、高き、大軍死也。  
西、此、高き、立花城は、高き、村の、向き、山、の、高き、あり、徳載、  
徳載、高き、立花城は、高き、村の、向き、山、の、高き、あり、徳載、  
徳載、高き、立花城は、高き、村の、向き、山、の、高き、あり、徳載、

高橋紹運(四)

宗麟が次丹後守澄運の戦功を賞した件は、

北原守時守時文高橋の家に再婚した

高橋紹運が宗麟を討つた事を知りて、

宗麟は次丹後守澄運の戦功を賞した事を知りて、

高橋紹運が宗麟を討つた事を知りて、

宗麟は次丹後守澄運の戦功を賞した事を知りて、

高橋紹運が宗麟を討つた事を知りて、

宗麟は次丹後守澄運の戦功を賞した事を知りて、

高橋紹運が宗麟を討つた事を知りて、

宗麟は次丹後守澄運の戦功を賞した事を知りて、

高橋紹運が宗麟を討つた事を知りて、

宗麟は次丹後守澄運の戦功を賞した事を知りて、

高橋紹運が宗麟を討つた事を知りて、

宗麟は次丹後守澄運の戦功を賞した事を知りて、

高橋紹運が宗麟を討つた事を知りて、

宗麟は次丹後守澄運の戦功を賞した事を知りて、

高橋紹運が宗麟を討つた事を知りて、

宗麟は次丹後守澄運の戦功を賞した事を知りて、

高橋紹運が宗麟を討つた事を知りて、

宗麟は次丹後守澄運の戦功を賞した事を知りて、

高橋紹運が宗麟を討つた事を知りて、

宗麟は次丹後守澄運の戦功を賞した事を知りて、

高橋紹運が宗麟を討つた事を知りて、

宗麟は次丹後守澄運の戦功を賞した事を知りて、

高橋紹運が宗麟を討つた事を知りて、

宗麟は次丹後守澄運の戦功を賞した事を知りて、

高橋紹運が宗麟を討つた事を知りて、

宗麟は次丹後守澄運の戦功を賞した事を知りて、





折衝御事備てはし又後藤千代守

揚げんが 宗 股

あれをま盡し信にたかや平 折衝御事備てはし宗の取  
成于成りしう六方の信の事再成後とあられし事あり  
あるは月後宗元(頼朝)の御旨の如く宗時と揚成  
宗時御事備にたりし誠の旨に相りて揚成せよ

今年宗元(頼朝)御事備てはし大なる後宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ  
宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ 宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ

宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ 宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ  
宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ 宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ

宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ 宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ  
宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ 宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ

宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ 宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ  
宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ 宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ

宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ 宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ  
宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ 宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ

宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ 宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ  
宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ 宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ

宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ 宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ  
宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ 宗元(頼朝)の御旨に相りて揚成せよ

宗







兵を敵に多き力に用いて敵入近く果し得るもこれ

斬るも能くしとて其味方と備へ何れも悪くは詰り

多しとて其味方と備へ何れも悪くは詰り

しに其味方と備へ何れも悪くは詰り

故に其味方と備へ何れも悪くは詰り

備へ其味方と備へ何れも悪くは詰り

其味方と備へ何れも悪くは詰り

備へ其味方と備へ何れも悪くは詰り

其味方と備へ何れも悪くは詰り

備へ其味方と備へ何れも悪くは詰り

其味方と備へ何れも悪くは詰り

備へ其味方と備へ何れも悪くは詰り

其味方と備へ何れも悪くは詰り

備へ其味方と備へ何れも悪くは詰り

其味方と備へ何れも悪くは詰り

備へ其味方と備へ何れも悪くは詰り

其味方と備へ何れも悪くは詰り

備へ其味方と備へ何れも悪くは詰り

其味方と備へ何れも悪くは詰り

備へ其味方と備へ何れも悪くは詰り

其味方と備へ何れも悪くは詰り

備へ其味方と備へ何れも悪くは詰り

其味方と備へ何れも悪くは詰り

備へ其味方と備へ何れも悪くは詰り

其味方と備へ何れも悪くは詰り

備へ其味方と備へ何れも悪くは詰り

其味方と備へ何れも悪くは詰り

備へ其味方と備へ何れも悪くは詰り

其味方と備へ何れも悪くは詰り

備へ其味方と備へ何れも悪くは詰り

其味方と備へ何れも悪くは詰り

備へ其味方と備へ何れも悪くは詰り

其味方と備へ何れも悪くは詰り

備へ其味方と備へ何れも悪くは詰り

其味方と備へ何れも悪くは詰り

備へ其味方と備へ何れも悪くは詰り

はる下二千... 前後... 杉連兵... 大谷... 三...



同く元事は有る田は庄に就きりて其の地味も亦く  
黒國を治むるに事ありしに其の地味も亦く  
好むる事ありしに其の地味も亦く  
之に其の地味も亦く  
能く其の地味も亦く  
府として三千餘人を治むるに事ありしに其の地味も亦く  
其の地味も亦く  
其の地味も亦く  
其の地味も亦く  
其の地味も亦く  
其の地味も亦く  
其の地味も亦く  
其の地味も亦く



白く粉雪

秋月如雪 前夜の月より多き月を名に

付くはしめたる月を名に

秋月如雪 前夜の月より多き月を名に

付くはしめたる月を名に

秋月如雪 前夜の月より多き月を名に

付くはしめたる月を名に

秋月如雪 前夜の月より多き月を名に

付くはしめたる月を名に

秋月如雪 前夜の月より多き月を名に

付くはしめたる月を名に

秋月如雪 前夜の月より多き月を名に

付くはしめたる月を名に

②

秋月如雪 前夜の月より多き月を名に

付くはしめたる月を名に

秋月如雪 前夜の月より多き月を名に

付くはしめたる月を名に

秋月如雪 前夜の月より多き月を名に

付くはしめたる月を名に

秋月如雪 前夜の月より多き月を名に

付くはしめたる月を名に

秋月如雪 前夜の月より多き月を名に

付くはしめたる月を名に

于海に於ては、*the sea* の如く、*the sea* である。

既婚の男は、*married man* の如く、*married man* である。

一人のみである男は、*single man* の如く、*single man* である。

中一、*middle school* の如く、*middle school* である。

又曰、*middle school* の如く、*middle school* である。

老は、*old* の如く、*old* である。

若は、*young* の如く、*young* である。

往きは、*go* の如く、*go* である。

往まらざるを信じて、又曰、*go* の如く、*go* である。

先年、*last year* の如く、*last year* である。

けだし、*indeed* の如く、*indeed* である。

昔、*once upon a time* の如く、*once upon a time* である。

海、*the sea* の如く、*the sea* である。

海、*the sea* の如く、*the sea* である。

海、*the sea* の如く、*the sea* である。

海、*the sea* の如く、*the sea* である。

海、*the sea* の如く、*the sea* である。



Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a personal note. The text is dense and fills most of the page.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous block. It appears to be a continuation of the same letter or note.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It begins with a large initial letter, possibly 'A' or 'B', followed by several lines of dense, flowing script. The handwriting is characteristic of a historical cursive style, possibly from the 16th or 17th century. The text appears to be a personal communication or a formal document, given the structure and the use of capital letters.

Handwritten text in a cursive script, similar to the one above. This section also features a large initial letter and continues with several lines of dense, flowing script. The handwriting is consistent with the previous section, suggesting it is part of the same document or a related one. The text is written in a dark ink on aged paper, and the overall appearance is that of a historical manuscript or letter.





三つと秋月... 此の... 勿れとも... 又と昔... 其の... 三つ... 此の... 勿れとも... 又と昔... 其の... 三つ... 此の...

此の... 勿れとも... 又と昔... 其の... 三つ... 此の... 勿れとも... 又と昔... 其の... 三つ... 此の...





軸の...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

(三)

...  
 ...  
 ...  
 ...



○秋は秋半の山の嵐を我が旅の道程に  
ゆくをたのむ

○秋は秋半の川も旅の道程に  
ゆくをたのむ

秋は秋半の山も旅の道程にゆくをたのむ  
秋は秋半の川も旅の道程にゆくをたのむ  
秋は秋半の山も旅の道程にゆくをたのむ  
秋は秋半の川も旅の道程にゆくをたのむ  
秋は秋半の山も旅の道程にゆくをたのむ  
秋は秋半の川も旅の道程にゆくをたのむ  
秋は秋半の山も旅の道程にゆくをたのむ  
秋は秋半の川も旅の道程にゆくをたのむ

秋は秋半の山も旅の道程にゆくをたのむ

秋は秋半の川も旅の道程にゆくをたのむ

秋は秋半の山も旅の道程にゆくをたのむ

秋は秋半の川も旅の道程にゆくをたのむ

秋は秋半の山も旅の道程にゆくをたのむ

10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50  
51  
52  
53  
54  
55  
56  
57  
58  
59  
60  
61  
62  
63  
64  
65  
66  
67  
68  
69  
70  
71  
72  
73  
74  
75  
76  
77  
78  
79  
80  
81  
82  
83  
84  
85  
86  
87  
88  
89  
90  
91  
92  
93  
94  
95  
96  
97  
98  
99  
100

Handwritten text in a cursive script, likely a ledger or account book. The text is organized into columns and rows, with some entries appearing to be numerical or descriptive. The script is dense and fills most of the page.

22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50  
51  
52  
53  
54  
55  
56  
57  
58  
59  
60  
61  
62  
63  
64  
65  
66  
67  
68  
69  
70  
71  
72  
73  
74  
75  
76  
77  
78  
79  
80  
81  
82  
83  
84  
85  
86  
87  
88  
89  
90  
91  
92  
93  
94  
95  
96  
97  
98  
99  
100

Handwritten text in a cursive script, similar to the left page. It appears to be a continuation of the ledger or account book, with entries in columns and rows. The script is consistent with the left page.









出陣と事代（住方）は...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...  
 ...





此の書は...  
 一、...  
 二、...  
 三、...  
 四、...  
 五、...  
 六、...  
 七、...  
 八、...  
 九、...  
 十、...

借て...  
 一、...  
 二、...  
 三、...  
 四、...  
 五、...  
 六、...  
 七、...  
 八、...  
 九、...  
 十、...

此其言の事也

此其言の事也

此其言の事也

此其言の事也

此其言の事也

此其言の事也

此其言の事也

此其言の事也

此其言の事也

此其言の事也

此其言の事也

此其言の事也

此其言の事也

の五十年... 龍... 七... 龍...

... 龍... 七... 龍...

... 龍... 七... 龍...

... 龍... 七... 龍...

... 龍... 七... 龍...

... 龍... 七... 龍...

... 龍... 七... 龍...

... 龍... 七... 龍...

... 龍... 七... 龍...

... 龍... 七... 龍...

... 龍... 七... 龍...

... 龍... 七... 龍...

... 龍... 七... 龍...

... 龍... 七... 龍...

... 龍... 七... 龍...

... 龍... 七... 龍...

... 龍... 七... 龍...

... 龍... 七... 龍...

... 龍... 七... 龍...

... 龍... 七... 龍...

... 龍... 七... 龍...

... 龍... 七... 龍...







此の如く又...  
 大工本...  
 三...  
 七...  
 秀...  
 三...

此の如く又...  
 大工本...  
 三...  
 七...  
 秀...  
 三...

(三) (三)

此の如く又...  
 大工本...  
 三...  
 七...  
 秀...  
 三...

第一節  
 ノ高小

三...





多量の...

中々出...

一、二...

と付て...

けさ...

あつた...

多く...

あつた...

すい...

さう...

あつた...

多量の...

中々出...

一、二...

と付て...

けさ...

あつた...

多く...

あつた...

すい...

さう...

あつた...

は野の...  
 共に...  
 依て...  
 依て...

野の...  
 依て...  
 依て...

○

三陸軍の部番持士の姓名

三陸軍の部番持士の姓名

備後七月十日三陸軍(鳥羽)の太田守長を討つ

太田守長を討つ事にして太田守長を討つ事にして

太田守長を討つ事にして太田守長を討つ事にして

守家門、城十郎大夫、託解長門守行直、赤星園守

出田守長、山度、川尻、合志、小竹、首藤、隱部、清

原、舟橋、徳成、山度、川尻、合志、小竹、首藤、隱部、清

國書、尾野、中野、吉美、園守、小幡、吉美、尾木

兵部、家康、同田、政美、田尻、江嶋、の清、藏、後、肥前

兵部、家康、同田、政美、田尻、江嶋、の清、藏、後、肥前

兵部、家康、同田、政美、田尻、江嶋、の清、藏、後、肥前

兵部、家康、同田、政美、田尻、江嶋、の清、藏、後、肥前

兵部、家康、同田、政美、田尻、江嶋、の清、藏、後、肥前

兵部、家康、同田、政美、田尻、江嶋、の清、藏、後、肥前

兵部、家康、同田、政美、田尻、江嶋、の清、藏、後、肥前

兵部、家康、同田、政美、田尻、江嶋、の清、藏、後、肥前

兵部、家康、同田、政美、田尻、江嶋、の清、藏、後、肥前

兵部、家康、同田、政美、田尻、江嶋、の清、藏、後、肥前

兵部、家康、同田、政美、田尻、江嶋、の清、藏、後、肥前

兵部、家康、同田、政美、田尻、江嶋、の清、藏、後、肥前

兵部、家康、同田、政美、田尻、江嶋、の清、藏、後、肥前

兵部、家康、同田、政美、田尻、江嶋、の清、藏、後、肥前

兵部、家康、同田、政美、田尻、江嶋、の清、藏、後、肥前

兵部、家康、同田、政美、田尻、江嶋、の清、藏、後、肥前

兵部、家康、同田、政美、田尻、江嶋、の清、藏、後、肥前

兵部、家康、同田、政美、田尻、江嶋、の清、藏、後、肥前

兵部、家康、同田、政美、田尻、江嶋、の清、藏、後、肥前

兵部、家康、同田、政美、田尻、江嶋、の清、藏、後、肥前



カキハネノミヤコノ... (Text in Kuzushiji script, including the characters 女 and 若)  
 ... (Remaining lines of text on the right page)

... (Text in Kuzushiji script, including the characters 若 and 女)  
 ... (Remaining lines of text on the left page)



備十時... 後... 原... 部... 白... の...

せて... 皆... 長... 事... 此... 後... 此... 此...



信通は...  
 島中...  
 此...  
 此...

信通は...  
 島中...  
 此...  
 此...

屋敷を廻りて...

多分ちりり...

修を大...

田舎の... 是は...



厚録とて... 厚録とて... 厚録とて...

多式部、同部、九部、物部、... 多式部、同部、九部、物部、...

△此の予上の世後、村上、... △此の予上の世後、村上、...



△山内、... 山内、... 山内、...

右国、... 右国、... 右国、...

△三、... △三、... △三、...

和、... 和、... 和、...

多、... 多、... 多、...

島原の志軍出るに備へし向う前陣に陣取  
 〇名取の外陣に陣取兵三三のみの陣取  
 の外陣に陣取  
 〇名取の外陣に陣取兵三三のみの陣取  
 の外陣に陣取  
 〇名取の外陣に陣取兵三三のみの陣取  
 の外陣に陣取

の若くは... 初陣... 志軍...  
 〇名取の外陣に陣取兵三三のみの陣取  
 の外陣に陣取  
 〇名取の外陣に陣取兵三三のみの陣取  
 の外陣に陣取

同

浮気... 禁断... 生首... 若くは... 二重... 陽...

十三... 赤い... 山... 精...

元十廿日又者名和也

此日訪原野...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...

Main body of handwritten text in a cursive style, possibly containing a narrative or list. Includes some words that appear to be 'KUMAKURI' and 'SUSUKI'.

Bottom section of handwritten text, separated by a horizontal line from the main body. Contains several lines of calligraphic script.



市と糖口とはは...  
 島...  
 作...  
 兼...  
 信...  
 信...

中...  
 せ...  
 〴〵...  
 〵...  
 〵...



目録

○福徳の徳を尊厳に再なるに... 徳の徳を尊厳に再なるに... 徳の徳を尊厳に再なるに...

薩使の徳を尊厳に再なるに... 徳の徳を尊厳に再なるに... 徳の徳を尊厳に再なるに... 徳の徳を尊厳に再なるに...

の徳を尊厳に再なるに... 徳の徳を尊厳に再なるに... 徳の徳を尊厳に再なるに... 徳の徳を尊厳に再なるに... 徳の徳を尊厳に再なるに...

借入金は...  
 金正千八百...  
 金正千八百...  
 金正千八百...

西村りりる

西村りりる  
 借入金...  
 金正千八百...

西村りろ貴死... 西村りろ貴死

主あちの... 西村りろ貴死... 西村りろ貴死

西村りろ貴死... 西村りろ貴死... 西村りろ貴死

西州のりきり

西州のりきり... (Main text on the left page, dense handwritten Japanese characters)

諸君... (Main text on the right page, dense handwritten Japanese characters)

本賦... (Small vertical text on the right page)

肆

西州のりきり... (Text block on the right page, starting with a circled character)

白... (Small vertical text on the right page)

西伏りも我死

比のりもの  
二千七の  
降のり  
上あ  
後  
追  
死  
産  
り

た  
井  
ま  
知  
死  
な  
存  
才

の正主は...  
 おお...  
 くれ...  
 何...  
 物...  
 上...  
 何...

酒杖りる...  
 し...  
 は...  
 一...  
 中...  
 別...  
 万...  
 先...



佐くこねの... 五

中... 五

一非常ニ羽、風脚... 五

賣録急ヤ要スル... 五

一辨半... 五



三... 五

... 五

第十三... 五

... 五

備て... 五

西... 五

西村りる其の

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a diary. The text is dense and fills most of the page.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. It includes a large, bold character '三' (San) at the beginning of a section.

Handwritten text at the bottom of the page, possibly a signature or a closing remark.



又... 前... 守持  
 福... 共... 我...  
 一... 切...  
 一... 切...

西村りる責死

西村... 責死... 其...

西村... 責死... 其...

支出

本年の支出は、前年より増加し、

支出は

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百

本年の支出は、前年より増加し、

本年の支出は、前年より増加し、

本年の支出は、前年より増加し、

しつて... 中島左馬助... 今八郎... 御門... 伊豆... 加賀... 備前... 同部... 伊豆... 河原... 上信... 平井氏部

西州

中島左馬助... 今八郎... 御門... 伊豆... 加賀... 備前... 同部... 伊豆... 河原... 上信... 平井氏部

部方神、越古路市、同部ゆ、久保盛ゆ、今ゆる後ア、  
 山城古路市、同部ゆ、花田家内、同部ゆ、上村刑ア、  
 市村外記、同部ゆ、住る者、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、  
 此部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、

又形、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、  
 同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、  
 同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、  
 同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、  
 同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、

同部ゆ

同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、  
 同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、  
 同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、  
 同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、  
 同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、

同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、

同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、  
 同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、  
 同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、  
 同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、  
 同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、同部ゆ、

本縣合管野味町五ノ、共ニ委員、難務也

子路が世ははたさるゝすれは  
あふちまひるは 三十八 林  
あふちまひるは 三十九 林  
あふちまひるは 四十 林  
あふちまひるは 四十一 林  
あふちまひるは 四十二 林  
あふちまひるは 四十三 林  
あふちまひるは 四十四 林  
あふちまひるは 四十五 林  
あふちまひるは 四十六 林  
あふちまひるは 四十七 林  
あふちまひるは 四十八 林  
あふちまひるは 四十九 林  
あふちまひるは 五十 林

あふちまひるは 三十八 林  
あふちまひるは 三十九 林  
あふちまひるは 四十 林  
あふちまひるは 四十一 林  
あふちまひるは 四十二 林  
あふちまひるは 四十三 林  
あふちまひるは 四十四 林  
あふちまひるは 四十五 林  
あふちまひるは 四十六 林  
あふちまひるは 四十七 林  
あふちまひるは 四十八 林  
あふちまひるは 四十九 林  
あふちまひるは 五十 林



又夜は湯屋をたきやうに十個を備とるなりといふ

陰謀は死ぬるに似るなりといふ又控の死影に非ざる

兵衛中の死影は、今午に控人なるか、此の控に

控とあてて死影に非ざるなりといふは、控は後

草芥とて死ぬるに似るなりといふは、控は後

国の如く死ぬるに似るなりといふは、控は後

は死ぬるに似るに似るに似るに似るに似るに似る

死ぬるに似るに似るに似るに似るに似るに似る

死ぬるに似るに似るに似るに似るに似るに似る

死ぬるに似るに似るに似るに似るに似るに似る

死ぬるに似るに似るに似るに似るに似るに似る

死ぬるに似るに似るに似るに似るに似るに似る

死ぬるに似るに似るに似るに似るに似るに似る

死ぬるに似るに似るに似るに似るに似るに似る

死ぬるに似るに似るに似るに似るに似るに似る

死ぬるに似るに似るに似るに似るに似るに似る

死ぬるに似るに似るに似るに似るに似るに似る

死ぬるに似るに似るに似るに似るに似るに似る

死ぬるに似るに似るに似るに似るに似るに似る

死ぬるに似るに似るに似るに似るに似るに似る

死ぬるに似るに似るに似るに似るに似るに似る

死ぬるに似るに似るに似るに似るに似るに似る

Handwritten text in a cursive script, possibly representing a list or account. The text is densely packed and spans several lines.

Handwritten text in a cursive script, continuing the list or account from the previous section.

Handwritten text in a cursive script, possibly serving as a summary or conclusion to the entries above.

己の誤りにて時を過すは如何なる事か  
 又結末の力にあらざるは如何なる事か  
 己の誤りにて時を過すは如何なる事か  
 又結末の力にあらざるは如何なる事か

己の誤りにて時を過すは如何なる事か  
 又結末の力にあらざるは如何なる事か  
 己の誤りにて時を過すは如何なる事か  
 又結末の力にあらざるは如何なる事か

己の誤りにて時を過すは如何なる事か  
 又結末の力にあらざるは如何なる事か

己の誤りにて時を過すは如何なる事か  
 又結末の力にあらざるは如何なる事か

己の誤りにて時を過すは如何なる事か  
 又結末の力にあらざるは如何なる事か

己の誤りにて時を過すは如何なる事か  
 又結末の力にあらざるは如何なる事か



物品

Handwritten notes in Japanese, including: 此の品は... (This item is...), 二階品 (Second floor goods), 四半 (Half), and 同大... (Same size...). The text is written vertically in columns.

種目	概算	詳算
繰上繰下	六三〇〇〇〇	六三〇〇〇〇
一寄	六三〇〇〇〇	六三〇〇〇〇
合	六三〇〇〇〇	六三〇〇〇〇
繰	六八二六四三	六八二六四三

繰上繰下



後世に於ては内蔵の... 其の...

其の... 其の...

其の... 其の...

其の... 其の...

其の... 其の...

立花... 其の...

亦... 其の...

其の... 其の...

其の... 其の...

其の... 其の...

其の... 其の...

其の... 其の...

其の... 其の...

其の... 其の...

其の... 其の...

其の... 其の...

其の... 其の...

後 正令の所ハ  
 の。後 正令の所ハ  
 了す  
 列は  
 4つ

正令の所ハ  
 の。後 正令の所ハ  
 了す  
 列は  
 4つ



了すの、

しるしを、  
あつちを、  
早くしるしを、  
の、  
の、  
の、

三六

三月二十一日半期

物

。、  
。、  
。、

しるしを、  
あつちを、  
早くしるしを、  
の、  
の、  
の、  
の、  
の、  
の、  
の、

此は...  
 子...  
 孫...  
 子...  
 孫...  
 子...  
 孫...  
 子...  
 孫...

此は...  
 子...  
 孫...  
 子...  
 孫...  
 子...  
 孫...  
 子...  
 孫...

一、防衛の善くはるるは、  
 咽喉をてはるるは、  
 山部形、  
 掃部は、  
 各四、  
 客下、  
 女、  
 利、  
 三、  
 各、

山部形、  
 掃部は、  
 各四、  
 客下、  
 女、  
 利、  
 三、  
 各、

可成りあるもの

前年より

江戸市中

より

ある

八月二分

五郎の碑文

三

五郎の碑文	五郎の碑文	五郎の碑文	五郎の碑文
五郎の碑文	五郎の碑文	五郎の碑文	五郎の碑文
五郎の碑文	五郎の碑文	五郎の碑文	五郎の碑文
五郎の碑文	五郎の碑文	五郎の碑文	五郎の碑文

江戸市中の事

江戸市中の事

積段  $\frac{1}{2} \frac{1}{3} \frac{1}{4} \dots \frac{1}{n}$   $\frac{1}{n+1}$   $\frac{1}{n+2}$   $\frac{1}{n+3}$   $\dots$   $\frac{1}{2n}$   $\frac{1}{2n+1}$   $\frac{1}{2n+2}$   $\frac{1}{2n+3}$   $\dots$   
 各項の差  $\frac{1}{2n+1} - \frac{1}{2n+2} = \frac{1}{(2n+1)(2n+2)}$   
 各項の和  $\frac{1}{2} + \frac{1}{3} + \frac{1}{4} + \dots + \frac{1}{2n} + \frac{1}{2n+1} + \frac{1}{2n+2} + \frac{1}{2n+3} + \dots$   
 各項の積  $\frac{1}{2} \times \frac{1}{3} \times \frac{1}{4} \times \dots \times \frac{1}{2n} \times \frac{1}{2n+1} \times \frac{1}{2n+2} \times \frac{1}{2n+3} \times \dots$   
 各項の差  $\frac{1}{2n+1} - \frac{1}{2n+2} = \frac{1}{(2n+1)(2n+2)}$   
 各項の和  $\frac{1}{2} + \frac{1}{3} + \frac{1}{4} + \dots + \frac{1}{2n} + \frac{1}{2n+1} + \frac{1}{2n+2} + \frac{1}{2n+3} + \dots$   
 各項の積  $\frac{1}{2} \times \frac{1}{3} \times \frac{1}{4} \times \dots \times \frac{1}{2n} \times \frac{1}{2n+1} \times \frac{1}{2n+2} \times \frac{1}{2n+3} \times \dots$

各項の差  $\frac{1}{2n+1} - \frac{1}{2n+2} = \frac{1}{(2n+1)(2n+2)}$   
 各項の和  $\frac{1}{2} + \frac{1}{3} + \frac{1}{4} + \dots + \frac{1}{2n} + \frac{1}{2n+1} + \frac{1}{2n+2} + \frac{1}{2n+3} + \dots$   
 各項の積  $\frac{1}{2} \times \frac{1}{3} \times \frac{1}{4} \times \dots \times \frac{1}{2n} \times \frac{1}{2n+1} \times \frac{1}{2n+2} \times \frac{1}{2n+3} \times \dots$   
 各項の差  $\frac{1}{2n+1} - \frac{1}{2n+2} = \frac{1}{(2n+1)(2n+2)}$   
 各項の和  $\frac{1}{2} + \frac{1}{3} + \frac{1}{4} + \dots + \frac{1}{2n} + \frac{1}{2n+1} + \frac{1}{2n+2} + \frac{1}{2n+3} + \dots$   
 各項の積  $\frac{1}{2} \times \frac{1}{3} \times \frac{1}{4} \times \dots \times \frac{1}{2n} \times \frac{1}{2n+1} \times \frac{1}{2n+2} \times \frac{1}{2n+3} \times \dots$

甲

秀吉親征の事と云ふは其の事と云ふは其の事

此の事には其の事と云ふは其の事と云ふは其の事

此の事には其の事と云ふは其の事と云ふは其の事

此の事には其の事と云ふは其の事と云ふは其の事

此の事には其の事と云ふは其の事と云ふは其の事

備て秀吉親征の事と云ふは其の事と云ふは其の事

此の事には其の事と云ふは其の事と云ふは其の事

此の事には其の事と云ふは其の事と云ふは其の事

此の事には其の事と云ふは其の事と云ふは其の事

此の事には其の事と云ふは其の事と云ふは其の事

聯合事業ニ盡力スルニ依リテ其の事と云ふは其の事

第四

本會事業ノ進行ヲ促進スルニ依リテ其の事と云ふは其の事







其形は比多の國に在り

四十二

○慶の大軍を以て轉じて豊後を以て討つ

○秀吉の先づいふ所を以て其の先づいふ所を以て

水略

信て島津は其の先づいふ所を以て其の先づいふ所を以て

○一時大軍を以て其の先づいふ所を以て其の先づいふ所を以て

○其の先づいふ所を以て其の先づいふ所を以て其の先づいふ所を以て

○其の先づいふ所を以て其の先づいふ所を以て其の先づいふ所を以て

○其の先づいふ所を以て其の先づいふ所を以て其の先づいふ所を以て

○其の先づいふ所を以て其の先づいふ所を以て其の先づいふ所を以て

○其の先づいふ所を以て其の先づいふ所を以て其の先づいふ所を以て

○其の先づいふ所を以て其の先づいふ所を以て其の先づいふ所を以て

坂井政重が、徳川家康に、徳川家の家臣として、

幕府の成立に、徳川家康の意向を、

徳川家康の意向を、

徳川家康の意向を、

徳川家康の意向を、

徳川家康の意向

徳川家康の意向を、

徳川家康の意向を、

徳川家康の意向を、

徳川家康の意向を、

徳川家康の意向を、

徳川家康の意向を、



四十三

薩の大軍宿内... 我は... 指さるる...

直

秀吉の先陣... 大軍... 宿内... 我は... 指さるる...

鮮

新て秀吉の先陣... 大軍... 宿内... 我は... 指さるる...

西軍... 宿内... 我は... 指さるる...

死に... 宿内... 我は... 指さるる...





白のり申用にて高野山に於て...  
 殊に...  
 此を...  
 物志...  
 心を...  
 好んで...  
 今...  
 兄...  
 西...

高野山の...  
 一八六四...  
 一正〇〇〇...  
 五八八八...  
 一正四八...

大なる...  
 此...  
 今...  
 余...





下野の... 北野...  
 丹下...  
 久野...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

柿の皮を剥いて 皮をとりぬぐ。ぬぐった皮を油で炒め、

のりをつけて

④ 柿の皮を剥いて油で炒め、のりをつけて、

日向紙で包む。

日	時間	場所	備考
...	...	...	...

俵を剥き、皮を剥いて、油で炒め、のりをつけて、日向紙で包む。

⑤ 柿の皮を剥いて、油で炒め、のりをつけて、日向紙で包む。  
 ⑥ 柿の皮を剥いて、油で炒め、のりをつけて、日向紙で包む。  
 ⑦ 柿の皮を剥いて、油で炒め、のりをつけて、日向紙で包む。  
 ⑧ 柿の皮を剥いて、油で炒め、のりをつけて、日向紙で包む。  
 ⑨ 柿の皮を剥いて、油で炒め、のりをつけて、日向紙で包む。  
 ⑩ 柿の皮を剥いて、油で炒め、のりをつけて、日向紙で包む。

運轉の... 正六八八三六... 正四八八...  
 陸軍の... 正六八八三六... 正四八八...  
 後... 正六八八三六... 正四八八...  
 岸... 正六八八三六... 正四八八...  
 我... 正六八八三六... 正四八八...  
 空... 正六八八三六... 正四八八...  
 内... 正六八八三六... 正四八八...  
 三... 正六八八三六... 正四八八...  
 五... 正六八八三六... 正四八八...

物... 正六八八三六... 正四八八...  
 我... 正六八八三六... 正四八八...  
 空... 正六八八三六... 正四八八...  
 内... 正六八八三六... 正四八八...  
 三... 正六八八三六... 正四八八...  
 五... 正六八八三六... 正四八八...  
 今... 正六八八三六... 正四八八...  
 本... 正六八八三六... 正四八八...



早六

○香毛輝と 香毛と香毛は 香毛と香毛は 香毛と香毛は 香毛と香毛は

○秋月 香毛と香毛は 香毛と香毛は 香毛と香毛は 香毛と香毛は

香毛と香毛は 香毛と香毛は 香毛と香毛は 香毛と香毛は

香毛と香毛は 香毛と香毛は 香毛と香毛は 香毛と香毛は 香毛と香毛は 香毛と香毛は

香毛と香毛は 香毛と香毛は 香毛と香毛は 香毛と香毛は 香毛と香毛は 香毛と香毛は 香毛と香毛は

久々昔田原に三景を詣りて松蘿堂を尋ねありしが

六林相親臨合管興各

ありしを公の記に記す

しんせいの水に風を絶えけりて

の霧の如くはるかに青き雲を

見せしむるは

此の地は昔に

上りたりの

やうに

此の地は昔に

上りたりの

やうに

此の地は昔に

上りたりの

やうに

此の地は昔に

上りたりの

やうに

此の地は昔に

〇

万々其の如く... 事名物...

得たることを... 之れを... 之れを... 以て... 行々... 事なり...

夫も其の如く... 此れは... 事なり... 其れは...

依りて... 此れは... 事なり... 其れは...

のりたれぬのしほは後編と出らん

はつれて奥の積をきつて御福をあらわす御徳をあらわすの

先財を挿入するあたはとてあらはれし御徳をあらわす御徳をあらわすの

御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす

御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす

御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす

御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす

御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす

御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす

御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす

御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす

御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす

御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす

御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす御徳をあらわす



出陣の御事

侍之儀は先ず御事

老臣之儀は先ず御事

先ず御事

先ず御事

先ず御事

先ず御事

先ず御事

先ず御事

先ず御事

先ず御事

先ず御事

先ず御事

先ず御事

先ず御事

先ず御事

先ず御事

先ず御事

先ず御事

先ず御事

先ず御事

先ず御事

先ず御事

先ず御事

絶美河...  
凡そ申すのは...  
...

年...  
の...  
...

父...  
弟...  
...

父の...  
...

出陣...  
...

四月...  
...

...

...



是の事は...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

陽の事...  
 人...  
 日...  
 再...  
 の...  
 元...  
 傳...

此...  
 留...  
 号...  
 の...  
 教...  
 年...  
 回...  
 此...  
 此...





左幸存ありては...  
 質のけは...  
 おま...  
 奥の...  
 の...  
 ち...  
 と...  
 け...  
 社...

の...  
 け...  
 て...  
 昔...  
 一...  
 色...  
 國...  
 一...  
 の...



その時、*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、  
*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、

*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、  
*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、

*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、  
*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、

市街に *St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、  
*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、

有る、*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、  
*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、

ありて、*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、  
*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、

ありて、*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、  
*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、

ありて、*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、  
*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、

ありて、*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、  
*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、

ありて、*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、  
*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、

ありて、*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、  
*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、

ありて、*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、  
*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、

ありて、*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、  
*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、

ありて、*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、  
*St. John's* 法橋の門下生と云ふ者あり、

長年あつての事(1901)年  
 6月 20日 門田村の町を  
 往く事になった。門田村の  
 町は、今も昔も、その昔  
 の如く、田舎の町である  
 事である。町には、商店  
 なども、数軒あるのみで、  
 大抵は、田舎の町である  
 事である。

(25)

石田寺の事(1901)年  
 6月 20日 門田村の町を  
 往く事になった。門田村の  
 町は、今も昔も、その昔  
 の如く、田舎の町である  
 事である。町には、商店  
 なども、数軒あるのみで、  
 大抵は、田舎の町である  
 事である。

門田村	門田村	門田村
門田村	門田村	門田村
門田村	門田村	門田村
門田村	門田村	門田村

中村大無三

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十

博多  
外商 鳴呼 高橋 德次郎

博多外商鳴呼高橋徳次郎

清運生

少年志を立て身を一膳夫より起る一臂を以て振ひ  
遠く南洋新嘉坡へ航渡するに千辛萬苦を嘗み遂  
に彼地へ一商店を営み進んで英領コロムビア海へ轉ると  
猶ほも進んで西澳利亞へ移る此の偏地へ各商店を創  
設するも多少の財産を積み行く將に我博多人種の氣  
宇と海外の雄飛を以て帝國實業界の銜鳴を以て責  
任と嘆息を以て両肩に擔ぎる其れ萬斛の雄馬と一  
斤の宏碑とを南洋の隅に遺して不帰の客となり其れ悲

三島の懐中から飛部に接する方恨むのみならず、茲に氏が素  
性、経歴と摘揚して、以て氏が追放の事なきを恐るるを  
欲するものあり。

氏は文久三年壬辰六月十日吉の東大紅と云ふ博多山笠の櫓に  
入ると、常高くと連呼するも、同時に我博多新川端町七十  
九番屋敷に於て、叩きの聲を聞き、母が父は高橋藤兵衛、  
料理人も昔と云ふも、三橋亭の旧持主、藤兵衛は  
同町大島徳平の長女の子で、其腹の主人の兄弟姉妹であ  
り、長女十代、親部は、就き、縫浦の手技、母は、  
に迎へられて、渡洋を、目下英領コレヒヤ海に於て、手技で、

長崎政次郎長と藤七と林と、  
一、上町新地三番地に住するも、一、海は、  
二、次女常子は、大濱三丁目、一、山本正太郎、嫁附と、  
三、三女雪子は、氏の伴、りて、渡洋、目下、氏が新嘉坡の  
商店と、徳平、長崎、  
父の名を、徳平、  
長崎高島に在る名、炭の、高島、  
か、は、  
で、稼、  
る、が、あ、り、性、豪、壯、  
徳、平、兄、妹、は、そ、れ、

一、上町新地三番地に住するも、一、海は、  
二、次女常子は、大濱三丁目、一、山本正太郎、嫁附と、  
三、三女雪子は、氏の伴、りて、渡洋、目下、氏が新嘉坡の  
商店と、徳平、長崎、  
父の名を、徳平、  
長崎高島に在る名、炭の、高島、  
か、は、  
で、稼、  
る、が、あ、り、性、豪、壯、  
徳、平、兄、妹、は、そ、れ、

との交熟銀もさうく遠い松子と宮吉と結婚する  
宮吉夫妻は踵て大板に出て京所堀前門上り書屋  
敷にありて外高に従事するもあはれなり  
氏は川端町の旅で國長は容態温和諸病も癒る  
父の業を継ぎて新理を業とあつた氏に折るか枝  
にあするものあらはぬ明治十年三月に於て博覧會  
大板へ上つた時氏は悦と二十三歳多き氏は出た  
あつて手馴れな業で所々の新理店を稼ぎてあつた  
あつては母の天宮言ふ許しに寄食するも國長が實  
て冒険外高の俠氣に富た宮吉その昔は信を年

終年餘歳で此年終にまゝ道種々様々の商業を學  
みてあつた思ふは利潤もあつた彼外高の念益  
す助るも勞働は後約もして漸く其後を計の  
貯金も出来ぬ事七宮吉の氏も物の思ふに不屈の  
氣風ありて見込みの金圓を積む新嘉坡の渡航も外高の押  
險せしむる所は氏も難か難か雄偉業も區々の  
手技で以て世に渡すものありて聲を擧げ  
ふもの時操を信ちつてあつた今や母の天宮言が  
依頼をも負ふ躊躇なく其事を領する直に神戶に出  
て遠征の路の途に二十二年四月であつた氏は長年

辛苦の苛難を岸の事にして、目的の地に着くまで  
を得るに存外の旅費を要する事、裏僅に諸國に  
金を貯蓄するのみで目的の地に着くは着たし

此の物

昂まらぬ外國で斯くするの所持金は如何に  
這は余何せ入宛や大荷せんと、暫く思ふも暮し  
りたが風と手馴れぬ野蠻の事が胸に浮く

米のありあはれは、試みの制を造る事、流半  
米のありあはれは、試みの制を造る事、流半

米のありあはれは、試みの制を造る事、流半

米のありあはれは、試みの制を造る事、流半

米のありあはれは、試みの制を造る事、流半

米のありあはれは、試みの制を造る事、流半

米のありあはれは、試みの制を造る事、流半





入れ便船に積込んで此年五月廿三日神と云はれて新嘉坡に帰  
着るも何れも三個月の間に於て船中の向ひは不明  
三十七年の自清戦役には氏は同地にある居留本邦人協  
会に軍需品の献金をせしめしめられたり先き氏は官署  
と國南紅毛の計畫船や熟る英領コロネーヤ海入遠  
航と云ふ名を創りしものと有る新嘉坡の商店は皆多  
い高ちしもの宮廷と云ふ名を創りしものと有る  
英領コロネーヤ海入遠航と云ふ名を創りしものと有る  
七度は雜貨と木材木固と云ふ名を創りしものと有る  
事あるが氏は又た百尺の巨額に手と進めしものと有る  
の商店は官署夫妻及姉千代が専營する所と云ふ氏夫妻  
夫妻は氏が新嘉坡に於て娶りしものと有る肥前島原の産は更に  
傾利利亞へ遠航を同地のレイン町三十七號に於て榊類兼

果雜貨店と云ふ名を創りしものと有る三十七年の春より拮据經營茲  
に二個年の巨額と經へ前途大に期する所ありしが不幸に  
て肺病麻痺の難症に罹り三十七年八月十日に於て  
不帰の客と云ふ名を創りしものと有る維れ處に明治三年八月十日に於て  
りた本邦領事館員、居留の本邦人は氏が仕使いと將  
来有為の身と云ふ中途空敷く斃れしと惜み懇い葬誦  
を營み各義捐して其費を接ぐ千四百圓の額にも及ぶ  
葬式及石碑の寫影は英領レイン町に酒井官吉及姉  
千代子の許に贈り奉りしものと有る新嘉坡は多岐西の  
許へ轉送し共に出稼する居た高橋吉吉、博多川端の

入此便形と積んで此年昔古神と奉る新嘉は  
るゝこれの經營三個年いふ益の繁榮はたか

大島徳平が第おちの叔父(新嘉坡より氏を以て齋  
ちして博多に帰り来りしは、明治四年二月、鳴呼一商  
夫の身とて、異郷に此業をもち、ある社をもち、  
翁の氏が遺蹟に隨ひ、其の發表をもち、氏の婿千代子が刺  
繍の手技をもち、代を博多の刺繍師祝部安子の所  
より、多て其の馬手技の巧み、院の氏の邸の遠く南洋新  
嘉坡へ渡航せしは、即ち二十二年十月の、南洋の商路に  
烟眼をもち、そのものいふ、置て早稲、精業技か南洋  
地方の嗜好に適せし、も、、唐の婿千代子が其技の巧み、  
同地迎へて、製業のめ、、其販路を闊くの見、、てあり、

は

一忽

依て千代子、着地草々、数個の烟草入、、秋園其外種多る。  
模様を刺繍せしめて、店頭に掲ぐる、、か、、購求者相踵、、忽  
の書物、和洋雜貨の千代子は別い、、相い鳳皇  
の希類を備へ、店頭の招牌も、たか、、日英國の貴紳、  
殖民大臣であること、街路通行の條件の希類が目、  
甚く愛賞ある、所せし、、需められ、、はれ、、千代子は  
これは招袖で、非賣物を、、は別の製業、、と差出入、、とある、  
貴紳は注として、ちられ、、も、、あり、、千代子は別の鳳皇の、  
額を利得る、領事館を、、経て、、港へ、、進出、、し、、貴紳、  
細あり、高き、、装飾、、を、、贈られ、、と、、あり、、新、、縁、、を、、もち、

草掛け、身外、美内、は、家飾品、に、是、利儀の注、あり、ナ、ナ、  
 は、一、手、練、と、遠、く、身、用、に、供、せ、し、る、貴、紳、居、内、の、衣、掛  
 け、は、身、外、美、内、の、備、前、物、あ、り、か、歲、日、の、外、に、は、居、内、指、折  
 り、ま、じ、い、け、れ、と、同、地、の、神、經、さ、ら、し、ま、し、る、貴、紳、は、  
 邦、領、事、官、と、は、経、つ、餘、の、ナ、ナ、と、坐、室、の、延、ま、り、件、物、補  
 綴、の、ま、じ、い、さ、ら、し、る、教、回、同、室、内、に、詰、り、し、る、儀  
 修、飾、の、貴、紳、は、餘、の、ナ、ナ、と、さ、ら、し、る、美、術、室、の、展、覽、と  
 し、許、さ、れ、し、る、具、室、内、に、は、日、本、ナ、ナ、の、前、室、に、は、本、館、  
 等、什、の、ま、じ、い、傳、へ、し、る、具、室、内、に、は、驚、か、せ、し、る、ナ、ナ、の、  
 ナ、ナ、の、貴、紳、の、儀、は、居、内、の、ま、じ、い、し、る、手、掛、り、の、具、室  
 内、に、は、家、飾、品、と、し、る、貴、紳、は、是、に、全、く、博、多、の、師、家

注

内、の、は、家、飾、品、と、し、る、貴、紳、は、是、に、全、く、博、多、の、師、家  
 祝、部、の、賜、り、と、し、る、海、朝、監、獄、に、て、日、本、の、ま、じ、い、に、歸、り、し、る、師  
 恩、を、謝、せ、し、る、入、同、地、方、に、は、長、崎、の、島、崎、等、其、他、の、  
 各、方、に、は、出、稼、常、務、敷、ま、り、悉、く、商、業、常、務、本、邦、領、事、官、に  
 於、て、も、殊、に、長、崎、局、に、對、し、は、本、館、に、手、掛、り、し、る、の、み、は、刺、織、の、  
 手、掛、り、に、は、欄、立、の、製、せ、も、さ、ら、し、る、の、み、は、日、本、固、有、の、美、術、に、  
 遠、く、地、方、に、取、寄、り、し、る、の、み、は、貴、紳、の、券、欲、に、あ、ら、し、る、  
 し、か、は、本、邦、領、事、官、に、發、せ、し、る、の、み、は、身、外、儀、禮、に、は、手、掛、り、  
 取、寄、り、し、る、の、み、は、貴、紳、に、是、に、美、術、の、刺、織、  
 扇、風、を、特、に、ナ、ナ、注、文、あ、り、か、野、る、大、き、い、の、刺、織、品、に、

斎千代子一人の手にては、形請<sup>かたちを</sup>出<sup>だ</sup>す<sup>ま</sup>りて博多<sup>はくた</sup>の邊<sup>へ</sup>  
り多<sup>く</sup>は師家<sup>しや</sup>元<sup>もと</sup>氏<sup>し</sup>には百餘<sup>ひゃくじゆ</sup>人の工<sup>たくら</sup>あり、この邊<sup>へ</sup>は六月  
の猶<sup>なほ</sup>後<sup>ご</sup>博多<sup>はくた</sup>の園<sup>のゑん</sup>りて其<sup>その</sup>需<sup>もと</sup>め<sup>の</sup>に應<sup>こた</sup>へ<sup>ま</sup>す<sup>る</sup>こと請<sup>こ</sup>ら<sup>る</sup>は、  
はく承諾<sup>ちやくちやく</sup>あり、これは為<sup>な</sup>す<sup>る</sup>千代<sup>ちよ</sup>子<sup>こ</sup>は、<sup>し</sup>ね<sup>を</sup>制<sup>せい</sup>す<sup>る</sup>に、  
博多<sup>はくた</sup>の邊<sup>へ</sup>りて、<sup>し</sup>よ<sup>し</sup>四<sup>し</sup>年<sup>ねん</sup>二<sup>に</sup>月<sup>げつ</sup>の事<sup>こと</sup>あり、<sup>し</sup>ね<sup>を</sup>制<sup>せい</sup>す<sup>る</sup>に、  
と傳<sup>つた</sup>へ<sup>ら</sup>れ、<sup>し</sup>ね<sup>を</sup>制<sup>せい</sup>す<sup>る</sup>に、<sup>し</sup>よ<sup>し</sup>四<sup>し</sup>年<sup>ねん</sup>二<sup>に</sup>月<sup>げつ</sup>の事<sup>こと</sup>あり、  
せ、千代<sup>ちよ</sup>子<sup>こ</sup>は博多<sup>はくた</sup>の邊<sup>へ</sup>りて、<sup>し</sup>ね<sup>を</sup>制<sup>せい</sup>す<sup>る</sup>に、  
は晝<sup>ひる</sup>夜<sup>よ</sup>千<sup>せん</sup>代<sup>だい</sup>子<sup>し</sup>の、<sup>し</sup>ね<sup>を</sup>制<sup>せい</sup>す<sup>る</sup>に、  
品<sup>しん</sup>も出<sup>だ</sup>ま<sup>り</sup>て、<sup>し</sup>ね<sup>を</sup>制<sup>せい</sup>す<sup>る</sup>に、  
少<sup>せう</sup>島<sup>しま</sup>三<sup>さん</sup>羽<sup>う</sup>の、<sup>し</sup>ね<sup>を</sup>制<sup>せい</sup>す<sup>る</sup>に、

少島は身と違<sup>ちが</sup>ひ、<sup>し</sup>ね<sup>を</sup>制<sup>せい</sup>す<sup>る</sup>に、  
の、<sup>し</sup>ね<sup>を</sup>制<sup>せい</sup>す<sup>る</sup>に、  
真<sup>まこと</sup>の、<sup>し</sup>ね<sup>を</sup>制<sup>せい</sup>す<sup>る</sup>に、  
は、<sup>し</sup>ね<sup>を</sup>制<sup>せい</sup>す<sup>る</sup>に、  
二、<sup>し</sup>ね<sup>を</sup>制<sup>せい</sup>す<sup>る</sup>に、  
し、<sup>し</sup>ね<sup>を</sup>制<sup>せい</sup>す<sup>る</sup>に、  
品<sup>しん</sup>も、<sup>し</sup>ね<sup>を</sup>制<sup>せい</sup>す<sup>る</sup>に、  
致<sup>いた</sup>せ、<sup>し</sup>ね<sup>を</sup>制<sup>せい</sup>す<sup>る</sup>に、  
のは、<sup>し</sup>ね<sup>を</sup>制<sup>せい</sup>す<sup>る</sup>に、  
備<sup>び</sup>品の、<sup>し</sup>ね<sup>を</sup>制<sup>せい</sup>す<sup>る</sup>に、

此の書は、  
 明治二十年六月、  
 印刷  
 非賣品  
 福岡縣糟屋郡糟屋町三十三番地  
 福前兼發行所 江島 義彦  
 同縣田舎箱崎町十九番地  
 葉陽民三郎

博多鳴呼高橋徳次郎 畢  
 外高

明治二十年六月 印刷

非賣品

編輯者

福岡縣糟屋郡糟屋町三十三番地

福前兼發行所 江島 義彦

同縣田舎箱崎町十九番地

葉陽民三郎

遠賀郡の地卑く、鞍馬郡大峰山、赤麻郡馬見

福宮属民政略誌沿革

吉田切貫工事

遠賀郡の地卑く、鞍馬郡大峰山、赤麻郡馬見、赤麻郡國産山苔の大山源谷の流水赤麻川、鞍馬川、豊前川の洪流となり、遠賀川に併合し、他の小川も来會し、芦屋小玉里に海に入り、其湊口より西洋に向ひ、風亦吹埋められ、狭く大瀬、二里の上流、小井の處、霖雨、洪水、遠へハ遠賀川充溢、水溢れ、海の如し、五穀を害し、人民を苦しむ。中絶へす、長政君入封し、是を治し、昔害を除かんとし、自再治せしむ。此を視察し、底井野村の下、新遠賀川の東、小野渠を開き、川水を分ち、待

吉田折尾二村を過き長崎折尾の玉に至りて海  
に入れたるは水勢分れず害を除き且漕運直小黒  
崎並に達しなれば便利と知らん奉水も半ハ芦  
屋小流も水ハ其地の運送も塞りてまゝと定議  
し原伊豫程良二千石を領す初め野村勘左衛門  
直貞四子ハ百石聖口左衛門一善三子石領一成一  
子之婦を総司とし伊藤次郎冬徳領石谷浦上徳  
太史正之百二十五石亦を下司として元和七年  
正月十四日より大工を始めさせらるる八月と九  
十月ハ農民暇なく十一月と十二月も寧ろ水ハ  
五月を除きと疏鑿せし九年と起りて成りしに  
因八月長政君逝去せられしは今成せす志と

止ぬ○此遠賀川昔ハ幅石間或ハ十間より  
狭くは洲沙稀しして流水滞らす且川西上木  
月村の白水及と稱する支流を開き洪水も水  
を分ちて下流は芦屋の祇園橋より本水と合せ  
し之寛文中川東楠橋下大隈二村の地ハ幅二十  
間長五百三十間の渠を鑿りて本水と合し延  
享中彼白水は冬塞きし東の支水本水と合し  
く一流となし是より川中ハ洲沙を生ずる也阿  
是是を附洲田と稱す彼是を以て流水滞り害を  
なす中少くす○寛延中掃橋又之進松克郎総  
司となし藩祖の遺念を継ぎ人々より形事川林  
浦仁右衛門正一等と共に其地を視て渠ならん



遠賀の水害を除くを已ならせ鞍手嘉麻種波を  
中敷不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>水<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>藩<sub>レ</sub>社<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>定<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>せ<sub>レ</sub>水<sub>レ</sub>脈<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>逐<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>  
必<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>識<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>農<sub>レ</sub>民<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>せ<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>功  
ハ<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>民<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>救<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>ゆ<sub>レ</sub>小<sub>レ</sub>舟<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>然<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>元<sub>レ</sub>和<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>廢  
里<sub>レ</sub>徳<sub>レ</sub>川<sub>レ</sub>水<sub>レ</sub>脈<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>膽<sub>レ</sub>壺<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>今<sub>レ</sub>池<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>水<sub>レ</sub>満  
て<sub>レ</sub>里<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>地<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>激<sub>レ</sub>き<sub>レ</sub>水<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>渠<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>き<sub>レ</sub>故<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>鑿<sub>レ</sub>造<sub>レ</sub>ハ  
を<sub>レ</sub>救<sub>レ</sub>壇<sub>レ</sub>水<sub>レ</sub>元<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>復<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>畔<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>小<sub>レ</sub>山<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>祭<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>  
神<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>祭<sub>レ</sub>あり<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>甚<sub>レ</sub>忌<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>さ<sub>レ</sub>せ<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>  
と<sub>レ</sub>王<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>あり<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>祐<sub>レ</sub>克<sub>レ</sub>民<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>畏<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>強<sub>レ</sub>  
為<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>應<sub>レ</sub>き<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>阿<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>他<sub>レ</sub>議<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>採<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>膽<sub>レ</sub>壺<sub>レ</sub>の  
谷<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>避<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>西<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>車<sub>レ</sub>返<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>山<sub>レ</sub>百<sub>レ</sub>小<sub>レ</sub>渠<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>開<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>  
前後<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>元<sub>レ</sub>和<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>故<sub>レ</sub>脈<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>隨<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>問<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>法<sub>レ</sub>民<sub>レ</sub>を

言の如くハ彼<sub>レ</sub>祿<sub>レ</sub>山<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>遼<sub>レ</sub>小<sub>レ</sub>偏<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>小<sub>レ</sub>怒<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>予  
な<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>卷<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>祐<sub>レ</sub>克<sub>レ</sub>變<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>藩<sub>レ</sub>主<sub>レ</sub>徳<sub>レ</sub>高<sub>レ</sub>君<sub>レ</sub>  
告<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>變<sub>レ</sub>廢<sub>レ</sub>元<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>正月<sub>レ</sub>より<sub>レ</sub>工<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>起<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>徳  
自<sub>レ</sub>祐<sub>レ</sub>克<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>祿<sub>レ</sub>崎<sub>レ</sub>正<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>史<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>石<sub>レ</sub>工<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>す  
頭<sub>レ</sub>埜<sub>レ</sub>戸<sub>レ</sub>添<sub>レ</sub>七<sub>レ</sub>義<sub>レ</sub>勝<sub>レ</sub>古<sub>レ</sub>聖<sub>レ</sub>宅<sub>レ</sub>右<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>門<sub>レ</sub>元<sub>レ</sub>利<sub>レ</sub>勝<sub>レ</sub>邱<sub>レ</sub>文<sub>レ</sub>多<sub>レ</sub>傳  
後<sub>レ</sub>久<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>目<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>役<sub>レ</sub>吏<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>移<sub>レ</sub>拜<sub>レ</sub>せ<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>七年<sub>レ</sub>祐  
克<sub>レ</sub>精<sub>レ</sub>穢<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>五月<sub>レ</sub>浦<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>彦<sub>レ</sub>多<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>正<sub>レ</sub>武<sub>レ</sub>代<sub>レ</sub>より<sub>レ</sub>徳<sub>レ</sub>目<sub>レ</sub>と  
なる<sub>レ</sub>凡<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>渠<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>開<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>地<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>平<sub>レ</sub>坦<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>穿<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>き  
水<sub>レ</sub>とも<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>車<sub>レ</sub>返<sub>レ</sub>とい<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>小<sub>レ</sub>なる<sub>レ</sub>巖<sub>レ</sub>山<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>工<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>枕  
す<sub>レ</sub>予<sub>レ</sub>易<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>水<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>先<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>地<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>力<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>常<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>小<sub>レ</sub>巖<sub>レ</sub>石  
を<sub>レ</sub>鑿<sub>レ</sub>つ<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>横<sub>レ</sub>十<sub>レ</sub>石<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>定<sub>レ</sub>め<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>工<sub>レ</sub>吏<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>費<sub>レ</sub>す  
こと<sub>レ</sub>美<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>より<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>終<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>せ<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>先<sub>レ</sub>三<sub>レ</sub>間<sub>レ</sub>半<sub>レ</sub>より<sub>レ</sub>止

めたる長さ二百二十三間の巖を穿ちて通せ  
る深きハ高下相れとも深きハ六尺なり付  
後の渠を併せり同九年乙丑功成り水ハ同九  
月其功告を賞して祐克ヲ掛画を與へ非橋小采  
地三十石を贈り城戸古野ハ各新田百廿十石  
賜師ハ石を與へ程渠小力を當すハ一と命を  
らる○かく疏濬の功ハ成りとも新渠ハ流  
入る水暮く湛舟性兼使りらす且田に灌ぐと  
らす故に吉田民一田久化中村の総社山の岩  
を穿ちて水開き一石を引りハ万代不朽なるハ  
一と建言一々述ハ境厩村末野より臨井市を  
増長ハ支頭勝也又吾津後久城戸礫之進 命

を文けり総社山の跡の大石を穿ちり水開と  
同十二年春成り述ハ浩水と名開ちり壅く故に  
渠を穿ちり壅なく又本水ハ横二十八尺高六尺  
四寸此石碣を築きたり是を東井と稱す是ハ  
至渠ハ能流進運漕の舟道一田を也ハ水を引  
へり之作を賞し多く上下再改役とせらる程  
に流石程鏡り始らき水ハ昭和 年申水小橋  
十八尺高六尺六寸の石碣を築く是を西井と  
呼ハり是ハ至渠ハ元一封印の形なり  
豊前國田川郡の人民多く隘者ハ舟を上下し大  
に利を得り且渠ハ近き十五村の田を養ふ水  
も乏しあらす○既ハ一利を得進ハ申し一害を

生を凡布水の上飯塚より下草屋まで七里平  
流より水引後付け水砂礫を流し去る力乏しく  
沙海を成す中少ならず疎小は東西石碯より水  
益渡り且流ぬる間を用ふる所と常時ぬく分  
流を可なり水害を増しと甲敷の田圃湿度水難  
を更く水熱の年少りら次是を碯を築し之依也  
ととく民憂苦す故に碯を除き去らば使流し流  
ぬ毎に底水湧出と上流の砂洲を漲り除くは  
水とも渠水乏しくなりて船行滞り田作不足は  
しと識しぬるに執政の勅諭日野村早稲備  
利の旨を求めしと今の渠流の口より十五六町  
の上流楠橋村の内奉命といへる地の巖を穿断

しと水引を引し口とし且石間を設け其流三百  
四五十百横六百計新渠を開き楠橋の古川を碯  
を末と中間の斗門の邊より而渠水流し入ると  
碯を去りなると利完か多しと建白す享和三  
年冬祐備郡吏と在に其地を視しと其言用うへ  
しと決定しと文化元毎新奉以坂田新と市氏房  
小舎しけむと二月朔日しを属吏を移解しと  
是をを下しと彼巖の高き丈は原さ廿丈二尺五  
寸長き四十三百疏鑿しと中水を穿き其口を吸  
込と稱す末平地斗百斗十百を掘りしと古川を  
建し中間の斗門より至り凡長千九十八百なり  
同六月下旬終り功を成せしに水能く合れ下り

此水ハ東西の石碕を除き其里幸鞠の農民は後  
ハたとハ洪水なりとも速流しハ瀨ホ其田圃敷  
日水に没する憂を免れ且中の砂洲も漸々城す  
屋しハ傾杯を望み大功を賞せらるゝ中昔中  
里遠望物生は大社屋を利森八市名を幸田和  
大砂屋一田圃敷<sup>故名氏</sup>中間村庄屋作木活化<sup>故名氏</sup>  
こハ若田地を踏へり○此後幸鞠ハ穀菜豊熟し  
く財力足り水ハ水際ホ舟木を繋植し堤岸を  
固築し小流の汚濁急らまりしハ堤決此憂少  
けせとも上流赤穂の法川溜ゆる快流せす水滞  
りく二部の憂を生し水運ハ平民ハ鞍馬<sup>故</sup>  
村の岩鼻と稱する古塚より出くる巖石を搬す

とく是を繋ち除うんと此議を起し水運とも下  
流の幸鞠ハ峻拒して肯まな

此の幸田集村極末より丁吏を没せしと時侯  
を相ひし教を紀多きんと歎す此と也知る  
小由れし市痛物役所と此奉を細くし福世  
了言二函し先ちた里と少しかとも今ハ亡  
びた

贈從五位小藤平藏畧傳

680
I
1

故小藤平藏氏畧傳

故小藤平藏氏名勝忠平藏は其通稱なり小藤平吉の第三子にして天保十年亥五月十八日筑前國早良郡地行五番町に生れ嘉永元年十月族辻家を嗣きて藩の銃手組たり萬延元年六月本姓小勝に復籍す爲人勇壯活潑武藝を綜べ斬然として頭角を顯す氏は監獄吏たりと雖も勤王黨の志士に交り慨世憂國の思深かりし然るに志士中村岡太は夙に藩を脱し京撰にありて國事攷圖り文久三年八月京師變動後三條郷に長藩に隨從し筑長聯合大に天下に爲んとすの志あり氏等同士と語り岡太と聯絡を通して大に藩論攷振起せんことを期せしにも係らず



田太は京師に於て藩の手にて捕縛福岡へ送檻繫獄せられし  
変事を起す(文久三年癸卯二月)是に於て氏等は屢々審議して  
時勢は當に田太が罪を赦して以て長藩へ復せしむるに利あ  
るを以て當路者へ向け進言勸告しつゝありしも佐幕の一派に  
開塞せられ氏等は及つて嫌疑を蒙らんとするに至り遂に田  
太を脱牢せしめて以て長藩に復せしむる鹽機の處断を執  
らざるを得ざる所となりしを以て撰はれて田太の弟恒次  
郎(無可)と共に之を長藩へ護送すべしとの任を荷ふ氏は奮ふ  
て之に従ふ聽て志士は氏及恒次郎に一行を野村望東か山  
莊に於て訣宴す(元治元年甲子三月廿五日)平藏本夜直に當るを以て故らに同僚佐

田藤三郎に書状寄せて代番を依頼す其夜半氏は同士と共に  
柵木屋の獄舎を襲ひ其名を呼いて獄舎内叩く衆其後に  
隨ひて闖入す氏は先づ監舎に入り同役佐田藤三郎が卧せ  
し脊に跨り白刃を差突けて脅迫かし鎖鑰を索む其の  
隣舎には監察二名(戸島某)銃手二名(本松代五郎、吉村忠藏)  
宿直す同士の一手は亦た抜刀脅嚇して抗することを得さら  
しむる間に一手は早く鎖鑰を以て獄關を開き田太を  
連出し衆擁護して其場を脱す田太の出するや久しく  
一室に屏居したるの故を以て足立つを能はず平藏自ら之  
を脅して免る、事成得たりと去氏は一書を其場に遺





期し前夜大に酒食を供して母及姉妹に訣別す痛飲快話  
尤も諧謔を極むと云又涙を絞って兄弟に對し一書状家と遺  
せり氏か孝友と義烈の在る所を表出して餘蘊なきべし  
全文を掲ぐ

一孝道——少壯は徳主君に事為り一身を獻りす  
独り居て忠節を確しお自ら大か牢獄を収め休  
みて一時脱藩せしむるに母公より命を付し心配を  
せしむるに上り存しむるに此(國)家(に)付し一片  
の微名黙止せしむるに己の徳を以てせしむるに而え  
殊方と包しし後即し所を脱るる難きを以て己

い少壯は徳主君に事為り一身を獻りす  
獨り居て忠節を確しお自ら大か牢獄を収め休  
みて一時脱藩せしむるに母公より命を付し心配を  
せしむるに上り存しむるに此(國)家(に)付し一片  
の微名黙止せしむるに己の徳を以てせしむるに而え  
殊方と包しし後即し所を脱るる難きを以て己  
い少壯は徳主君に事為り一身を獻りす  
獨り居て忠節を確しお自ら大か牢獄を収め休  
みて一時脱藩せしむるに母公より命を付し心配を  
せしむるに上り存しむるに此(國)家(に)付し一片  
の微名黙止せしむるに己の徳を以てせしむるに而え  
殊方と包しし後即し所を脱るる難きを以て己

つゝまゝ美し目出方を少くもくつと語る

きめの多き文は破くともいふけふ

母は名跡に神しけつ

勝忠

馳て氏は田太を獄舎より救出し博多矢倉門より女大  
夫仙田ユキ子か家子三晝夜間潜匿し追手の搜索稍や  
おたれしを窺い平等寺越の絶險羊腸を跋躡して  
田代の志士に便りぬ此數里の險路を氏と恒次郎は交る  
田太を脊負みて難なく落延いしと雖も忽ち藩の捕  
吏に追躡せられ田代城四周して來り迫る對藩宣役平田

主米は嘗ての然諾と重んじ義膽を以て擁護すと雖も今  
は詮もなく主米が活断を以て公然對州藩を名乗りて筑  
前領内の六宿を聯行して入長せんとす此際氏は寧ろ死  
すべからば舊領内に死すべしとて既不出發せんとせし時恰も長  
藩小田村支助(稱取素彦男)が長崎表へ赴くの道次田代を  
過す小田村氏は田太と舊知ありしを以て大に六宿聯行  
此危殆を諭し長崎へ誘引して海路入長せしめんことを領  
しかり依り氏の一行は對州藩士に擁護せしむる若津より出船  
長崎に出で小田村氏の盡力にて快船に搭し馬關に入り  
田太と共に三條郷に謁見し氏は恒次郎と共に忠勇隊へ

編入せり此たり元治甲子六月京師の乱に名を小柴三郎兵衛  
 改称し長藩先發軍に隸し氏は奥木保臣の麾下ありて  
 鷹司殿入り四圍の幕軍と割戦數合大に敗れ泉州に隨い  
 天王山に退却ふしぬ而して氏は幸ふ一の瘡疾を負はず志  
 氣益々振ふ和泉氏は既に死を決し氏等をして長藩へ還  
 りて再舉を圖らしむ氏等は辛やして三田尻に遠り忠勇  
 隊に渡りし三條峯を守衛しつありしか峯か筑前轉坐  
 せらる事ふり此際高杉晋作義旗を馬關に樹て俗  
 論軍と決戦す中村圓太は意見と異に高杉の義軍  
 に従はざりしも氏は對州藩の同志と共に其義軍に従ひ

一戦、俗論軍を繪堂太田の邊に破りしなり此義軍に従

平藏の屠腹するや以錯とて  
 後に立てる者を顧み飛ぬて曰く  
 吾苟も武士として双刀を佩り  
 何そ他人を煩はす哉欲せんや  
 即ち從容として正座し遙に京師  
 及筑前を拜し刀を執りて腹を  
 割き其刀を取ら直して自ら  
 首刎て死す其勇膽剛氣暗者  
 皆嘆賞せざるはあし

於ては獨り氏一人のみなりし氏は意氣  
 長となり防州高森へ屯營し幕の再征  
 しか茲に氏か一身に奇禍を招くはな  
 かふらすれ雖何かの行違より開者の嫌  
 原に於て屠腹す死後に至り無實たりと  
 之を惜むと云是れ慶應元年丁丑五月十二

以上は其後皇宗の時當時の  
 況を實見せし土人の語に依り  
 知るを得たり

有七岡防國玖珂郡高森村真宗受光  
 觀定院釋淨覺普寂居士と号す明治元

年王政維新藩論歸正招魂社に祀られ三年庚午七月早祭

慶應五年閏五月十七日  
 觀定院釋淨覺普寂居士

筑前水士 小柴三郎 幸  
 信稱 行年廿三歳  
 右者當寺本堂激撃軍に實  
 御入隊、處智勇を以て開者  
 疑を受終、東河原に於て割腹す  
 日直を當下市埋葬場、於て之を  
 葬す  
 西に死後、至り其骨相毀ら軍  
 門の人皆之を惜み、去り  
 右、西去名傳  
 岡國玖珂郡高森村  
 真宗釋淨覺普寂居士  
 受光居士 守野性海  
 以三年志法寺に於て早祭す  
 此年ナリ

編入せり此たり元治甲子六月京師の乱に名を小柴三郎兵衛  
 改称し長藩先發軍に隸し氏は奥木保臣の麾下ありて  
 鷹司殿入り四圍の幕軍と劇戦數合大に敗れ泉州に隨い  
 天王山に退却ふしぬ而して氏は幸一の瘡疾を負はず志  
 氣益々振ふ和泉氏は既に死を決し氏等をして長藩へ還  
 りて再舉を圖らしむ氏等は辛やして三田尻に遠り忠軍  
 隊に復し三條郷を守衛しつありしか郷が筑前轉坐  
 せらる事とふり此際高杉晋作義旗を馬關に樹て俗  
 論軍と決戦す中村圓太は意見と異に高杉の義軍  
 に従はさりしも氏は對州藩の同志と共に具義軍に従い

慶應五年閏五月十七日

觀音院釋洋覺普寂居士

筑前長門 小柴三郎 幸一

右者當寺本堂激撃軍實出

御入隊處智勇を以て開者

疑を受て東河原に於て屠腹

日直を當下市埋葬場に於て

葬す

西に此布を至正堂相殿に

南向人比留之の情下云

右の西去名簿

周防國玖珂郡高森村

真宗觀音院普寂居士

慶應寺住持 宇野性

以三年志法寺に於て

八十九

一戦、俗論軍を繪堂太田の邊に破りしなり此義軍に従  
 いは筑前が藩に於ては獨り一人のみなりし氏は意氣  
 揚々として一方の長となり防州高森へ屯營し幕の再征  
 軍に膺らんしせしか茲に氏が一身に奇禍を招くとはな  
 ら其事實は詳かからずれ雖何かの行違より間有の娘  
 疑を受け東河原に於て屠腹す死後に至り無實たりと  
 明らかになり人皆之を惜むと云是れ慶應元年丁丑五月十二  
 日にして行年二十有七周防國玖珂郡高森村真宗受光  
 寺に埋葬す法名觀音院釋洋覺普寂居士と号す明治元  
 年壬政維新藩論歸正招魂社に祀られ三年庚午七月甲祭

（Faint vertical text on the left margin, likely bleed-through or additional notes.)

編入せり、はたし元治甲子六月京師の乱に名を小柴三郎共衛  
 政称し長藩先發軍に録し氏は奥本保臣。麾下ありて  
 廣司殿入り四圍の義軍と割戰數合大に敗れ泉州に隨  
 天王山小退却あり而して氏は幸子の瘡痍を負はず志  
 氣益中振ふ和泉氏は既に死を決し氏等をして長藩(還  
 して再舉を圖らしむ氏等は辛かして三田尻小遷り忠重  
 隊に侵し三條郷を守衛しありしか郷公筑前轉坐  
 せり、事より此際高杉晋作義旗を馬關小樹て、俗  
 論軍と決戦す中村圓太は意見と異にし高杉の義軍  
 に従はざりしも氏は對州藩の同志と共に其義軍に従ひ

一戦。俗論軍々繪堂太田の邊に破りしなり此義軍に従

於ては獨り、夫人のみなりし氏は意氣

長となり防州高森(屯營)一帯の再征

一が茲に氏か一身に奇禍を招くよりは

かふらずれ雖何かの行違より間者の娘

原に於て屠殺す死後に至り無算たり

之を惜むり云是れ慶應元年丁丑五月十三

一有六同防國政珂郡高森村真宗受光

一觀定院釋淨覺普寂居士号す明治元

年王政維新論歸正招魂社に祀られ三年庚午七月早祭

半藏の屠殺す、必鉛也とて  
 故に立て、者を頼み或は曰く  
 古司武士とて双刀の佩り  
 明て他人を憐れず欲せしむ  
 即ち從容とて至唾し遂に京師  
 凱明を拜し刀を執り、機を  
 機を、史に刀を取、通て目  
 目明て死す、其常勝則氣暗首  
 日噴噴せざるはあし  
 以上其校屋空の將當時時  
 況を言見せし人、託し、作し  
 知りて得たり

觀定院釋淨覺普寂居士  
 信稱、小柴三郎幸  
 統前浪士  
 行年廿三歳  
 右者當守本堂激戰軍實樂、  
 御念終、慶智勇、以之問者、懸  
 疑、受終、東前象、於之割腹、其  
 日血、當不市、埋葬焉、於之、  
 葬、  
 圖、死、後、至、五、堂、相、毀、之、軍、由、  
 名、聞、人、比、曾、之、悔、下、云、  
 右、傳、名、傳、  
 周、國、政、珂、郡、高、森、村  
 真、宗、觀、寺、派、先、守、執、發、取  
 慶、年、德、綱、字、野、性、海  
 以上三年志法事際已述及不し

料として永世銀七枚宛下賜全三三年靖國神社合祀全三十六年  
特旨を以て從五位を贈らばたり



